

クリスチャンとして私たちが生きてゆく時に「信仰生活」ということばと「教会生活」ということば、どちらも知っていると思います。「信仰生活」というとやや、個人的で自分自身のクリスチャンの歩みであり、「教会生活」とはより教会の計画やプログラム、様々な教会に関することに関わってゆくというニュアンスが強いと思います。そして何となく自分のことと教会のことは別のことのように思えます。しかしパウロは 3 節において自分自身を見つめることと 5 節にあるように教会はキリストのからだであり、そのからだとは私達一人一人であることを教えています。つまり、自分自身のことを考えることと教会のことを考えることとは繋がっているのです。

パウロはここで、私たちが自分をどう評価するか、ということの問題にしています。私たちはいつも自分で自分を評価しながら生きています。自分で自分を高く評価できると思えば安心するし、逆に自己評価が低くなり、自分はダメだと思うと不安を覚えるのです。だから私たちは自分の良い点、高く評価できるところはできるだけ大きく見たいし、自分の欠点、問題があるところはなるべく見たくない、そのために、自分を過大に評価することに陥りがちです。パウロはそれに対して、「神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」と言っています。「自分を慎み深く評価する」ことを勧めているのです生まれつきの私たちは、自分が何を持っているか、どんな能力、才能があるか、ということによって自分を量り、評価しています。そういう量りで自分を評価する時に必ず起っているのは、他の人との比較です。自分が持っているものや能力が多いか少ないかを私たちは、他の人が持っているものや能力と比較することによって初めて判断することができるからです。例えば自分が得ている年収が多いか少ないかは、世間において自分より沢山得ている人が多ければ「少ない」ということになるし、自分より少ない人が多いなら「まあまあ多い方だ」ということになるのです。同じことが、自分は何だけ善い行いをしているか、どれだけ愛があるか、どれだけ良い性格か、などあらゆることにあてはまります。人との比較の中で、自分の相対的な評価が、為替のレートのように上がったたり下がったりし、それに一喜一憂しているのが私たちなのではないでしょうか。自分が持っているもの、能力、才能によって自分を評価していることによってそういうことが起るのです。

#### <キリストの福音という新しい量りによって>

パウロはここで、クリスチャンには他の人との比較によって左右されることのない、全く別の量りが神によって与えられている。あなたがたはその新しい量りによって自分を評価することができる。その新しい量りで自分を評価して生きることがクリスチャンの生活なのだ、と教えているのです。神が与えて下さった、自分を評価する新しい量り、それは信仰の量りです。しかもそれは、信仰がどれだけあるかという「度合い」を量るのではなくて、信じている事柄、信仰の内容によって自分を評価するということです。私たちに与えられている信仰の内容、それは一言で言えば「イエス・キリストの福音」です。神の独り子イエス・キリストが、生まれつきの罪人であり、自分の力で救いを得ることができない私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さったことによって私たちの罪の赦しを実現して下さった、そして主イエスの復活によって、私たちにも、復活と永遠の命の希望が与えられており、イエス・キリストを信じる信仰によって私たちはその救いにあずかることができる、それが「キリストの福音」です。このキリストの福音という量り、物差しによって自分を評価するなら、そこには先ず、自分が救われようのない罪人であることが見えてきます。そして同時に、そのような罪人であるこの自分のために、神の御子が命を捨てて下さり、罪の赦し、贖いを成し遂げて下さったこと、神が御子の命をも与えて下さるほどに自分は愛されていることも見えてくるのです。キリストの福音という量りで見ると「救いようの無いほど罪深い者でありながら、キリストが自らのいのちを犠牲にしてまで救いたくなる愛すべき存在」それが私た

ちなのです。

<キリストの福音による自己受容はキリストの福音による他者受容へ>

そしてキリストの福音という新しい量りによって自分を見つめ、評価するようになることによって、私たちの、他の人を見つめる目、特に教会における信仰の仲間たちを見つめ、評価する目もまた新しくなり、変えられていきます。自分自身を新しい量りによって量り、評価することによって新しい自分が見えてくると同様に、他の人をも新しい目で見つめ直していくようになり、信仰の仲間との間に新しい交わりが築かれていく、それがキリスト信者に与えられる新しい生活なのです。信仰の仲間たちとの間にどのような新しい交わりが築かれていくのでしょうか。そのことが4、5節に語られているのです。4、5節にこのようにあります。「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」。他の人たちと共に「一つのからだ」を形づくっていく、そしてお互いとその一つのからだの部分となって共に生きていく、それが、キリストの福音という新しい量りによって自分と他の人とを評価するところに与えられていく新しい交わりです。他の人と自分とを比較しながら生きているところには、このような「一つのからだ」としての交わりは生まれません。比較においては、どちらが上か下か、どちらがより優れているか劣っているか、ということが常に問題になるのです。そして自分の方が上だ、優れていると思うと、相手を見下す高ぶりが生じます。自分が下だと思うと自己嫌悪と妬み、やっかみが起きます。そんなところには「一つのからだ」としての交わりが生まれるはずはありません。逆にますます違いと溝が生まれてきます。

<与えられている賜物>

キリストに結ばれた一つの体としての教会の交わりにおいて私たちは、他の人の良い所を見出し、喜び、尊重し、生かしていきます。それは6節にある「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っている」ということを信じて生きるということです。キリストの救いにあずかった信仰者それぞれに、神の恵みによって異なった賜物が与えられています。その賜物をお互いに認め合うことから、キリストに結ばれた一つの体としての交わりが始まります。

賜物についてはこれもまたキリストの福音によって自分を見ているかどうか問われます。別の言い方をすれば自分と神様との関係が大きく左右してきます。皆さん、嫉妬心ややっかみというのは関係の概念でとらえると今まで自分の持っていた関係が薄くなったり、取り去られると思うので起こります。例えばAさんとBさんが友達でしたが、最近AさんとCさんが仲良くなるとBさんに嫉妬心が起こりやすいですね。これはどういうことかと言うならBさんにとってAさんとの関係が薄くなってしまったり、消えてしまうように感じるからそうなります。神様との関係も同じです。自分に無い、賜物のある人を見ると何か自分の持っているものや出来ることが存在感を失ってしまうように思うのです。そして神様と自分の関係がそれほどしっかりしたものでないように思ってしまうのです。神の恵みの賜物は私という人間の評価を高め、存在感をアピールするために与えられているわけではありません。キリストのからだなる教会を建て上げるために与えられているのです。

<様々な賜物の二本の柱>

パウロは6節の後半から、信仰者たちに与えられている異なった賜物を並べています。「預言、奉仕、教え、勧め、分け与える（施し）、指導、慈善」です。これらの賜物が当時の教会の人々に与えられており、それが発揮されることによって教会が生きていたのです。その中で真っ先に挙げられているのは「預

言」です。これは、これから起ることを言い当てるという予言のことではありません。預言の預は「預金」の預であり、これは神の言葉を預かり、人々にそれを語り伝える言葉、ですから今の言い方では「説教」に当るものです。パウロはこの預言の賜物を何よりも大事にしました。預言がきちんとなされ、み言葉がしっかりと語られ、聞かれることによってこそ教会はキリストの体として築かれていくのです。そういう意味で預言の賜物は教会にとって最も重要なものだと言うことができます。

次に挙げられているのは「奉仕」です。預言と並ぶ第二の賜物としての奉仕は、苦しみや悲しみの中にある人、貧しい人、困っている人を支え助ける愛の働きを意味しています。この「預言」と「奉仕」は、キリストの体である教会が築かれるために、信仰者に与えられている神の賜物の中心となる二本の柱です。つまり教会は、み言葉が語られ、愛の働き、奉仕がなされることによってこそキリストの体として築かれるのです。

この二本の柱に付随するものとしてさらにいくつかの賜物が見つめられています。「教え」と「勧め」は「預言」に付随する賜物です。「預言」によって語られた神の言葉をさらに説明し、教えるのが「教え」の賜物であり、そのみ言葉に基づいて一人ひとりの生活に支え、慰め、励ましを与えていくのが「勧め」の賜物です。「預言、教え、勧め」によって私たちの生活が神の言葉によって導かれ、正され、整えられていくのだと言えるでしょう。

「分け与えること(施し)、指導、慈善」は、「奉仕」に付随する賜物です。「施し」や「慈善」は、社会的な弱者、病気の者や貧しい者を支えていく働きです。「指導」は様々なことに関わりますが、「施し」と「慈善」の間に置かれているということは、教会の施しや慈善の働きにおける指導、それを率先し、スムーズに行きわたるようにする賜物のことではないかと思われます。(思いつきは良いのだけれども誰がそれをするのか、いつまでに、どういう風にしてといった具体的な手順なり分かっていないと混乱したりします) 要するにこれらは、教会が愛の働き、奉仕に生きるための賜物です。

私たちはここに語られている様々な賜物の二本の柱をしっかり捉えておきたいと思います。パウロの時代の、まだ生まれて間もない教会において、神の言葉を語り、それによって一人ひとりの生活を導いていく賜物と、弱い者、貧しい者を助け支えるという愛の働きの賜物とが共に見つめられ、生かされていたのです。

さて、今日はみことばから 1)自分自身を神にあって健全に見ることは教会を建て上げることに大いにつながっていること 2)他の兄弟姉妹を、兄弟姉妹の賜物を健全に見ることが出来るなら主に喜ばれる真の教会を建て上げることが出来る。そのことを学んできました。

結論として私たちは、自分にどんな賜物が与えられているかをあまり考えなくてよいのです。また自分の賜物や奉仕に固執しないが良いのです。神はそんなことで私のことを評価してはおられません。他の人に与えられている様々な賜物をこそ神の恵みとして評価し、喜び、感謝し、自分に関しては、神が与えて下さっているもので十分だということを学ぶことが大事です。神がこの私のために、御ひとり子イエス・キリストの命を犠牲にして、罪の赦しを与え、自分を神の子として下さり、復活と永遠の命の約束を与えて下さいました。神がそこまで自分を愛して下さっているのですから、自分の評価はもういいのです。それよりも、人に与えられている賜物を正しく評価し、生かすことの方がよほど素晴らしいことです。そこに、「真の教会—キリストに結ばれた一つのからだ」が建て上げられてゆくのです。またそうなってゆく交わりに新たな祝福と恵みを増し加えて下さいます。私たちは主イエス・キリストのもとで一つの体を共に築いて行く豊かな交わりへと招かれているのです。